

\* 『ところ文庫18 常呂町の昔話2』から抜粋・編集

明治31年に岐阜県から移住・入植した藤橋ワキさん・久保田末乃さん・内藤タメさんの会話を编者／林不二夫さんがまとめたもの。会話には美濃弁が使われています。

ニシンは捕れて捕れて、だからニシンは6箱も7箱も買って、数の子も醤油樽にいっぱい漬けて冬中1ヶ月も2ヶ月も食べていたもんだ。ニシンはたくさん食べた食べた。糠漬けといって塩辛くして夏でも食べた。鮭でも何でも干して、割いて干したり、お新香の中に身欠きニシンを入れたり、冬のおかずにゴボウやニンジンと炊いて食べた。

あの頃はニシンがなんぼでも捕れた。ニシンばかりでなく、数の子だって大きなやつだった。市街に近かったのでモッコシヨイといって、上杉さんに頼まれてニシン背負いにいったことがある。行く時は空だから良いけれど、帰りにカマスに1箱入れてもらって、お墓のそばの坂を上るのがえらくて（辛くて）どうにかこうにか今の中学校のそばで一服してようやく家に帰ったことがある。（略）